

氏 名	佐 藤 公 美
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 426 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	中世北イタリアの地域国家と社会 —— 在地社会・党派・紛争と平和 ——

論文調査委員 (主査) 教授 服部良久 教授 南川高志 教授 小山 哲

論 文 内 容 の 要 旨

中世北部イタリアにおける国家的秩序は、自治都市共和国＝都市コムーネから、君主または支配都市を持つ地域／領域国家への移行によって特徴づけられる。本論文はこの地域／領域国家の形成過程を、広義の社会史的過程として位置づけ、在地社会と広域的な政治・領域秩序が接合されるダイナミズムと、それらを相互に結びつけつつ新たな秩序を形成してゆく紛争と平和、及びその担い手となる共同体や党派の実態を検討したものである。本論は計5章から成り、別に序論と結論が付されている。

序論「中世北イタリアにおける社会と地域国家研究の課題」は、日本とイタリア及び欧米学界の同研究テーマについての研究史を概観し、現状と課題を示したものである。

第1章「コムーネと広域秩序 —— 12・13世紀ロンバルディア・ピエモンテの都市間仲裁制 ——」は、地域国家形成の前身となるコムーネ時代における、一都市を超えた広域的な秩序の形成と維持のための都市間の協定を考察する。コムーネ時代の北イタリアでは、紛争の仲裁制を核とし、当事者の合意と承認に基づく秩序が、都市や貴族の間に成立していたが、その中で有力都市ミラノが、やがて強力なイニシアチヴを握り、影響力を強めていく。本論文第1章では、その過程が、戦争や紛争とその解決の行為の実践的メカニズムの内部から生じる動態として検討されている。仲裁は戦争遂行の過程において、当事者によって自らの正当性を主張する根拠としても利用された。こうして、繰り返される戦争と、仲裁を含む平和回復のための実践のなかで、当事者たちは自らに有利な結果を得ようと努め、その結果仲裁者の権威が高まっていった。しかし一方で同時期には、このような仲裁制を支えた領域の現実、特に農村部の領域構造に変化が見られ、都市や大貴族だけではなく、農村部の指導層とその構成員も又、実質的に地域秩序を担う実力を高め、その動向を左右するようになっていった。こうした事情からあらためて、農村部を含めた広域秩序の再編の必要が生じてくるのである。

このような展望を出発点として、第2章「中世北イタリア《準都市》共同体の形成と発展 —— カザーレ・モンフェラートと在地紛争 ——」では、農村部の都市的集落《準都市》が、地域の秩序を担う政治的主体として成長する過程が、在地紛争に焦点を当てて検討されている。検討対象とされた共同体カザーレは対内的平和秩序維持機能を担うとともに、シニョーレら上級支配者に対する強力な自立性を維持していく。このような成長は、隣村パチリアーノとの合併と集落の拡大によって促進されたが、それは両集落を相互に対立させ、同時にまた結びつけもする在地紛争の中から実現したものであった。共同体間の紛争状態が高まるとともに、各共同体の内部には対立する2党派が形成された。それぞれの党派は互いに集落を横断して構成員を共有しており、共同体の合併は、これらの党派の諸集落に跨る結合と、その人的要素の共通性によって実現したことが示されている。このような党派的抗争は、より広い都市間の抗争にも同盟を介して結合し、農村部の在地社会をも広域秩序へと結びつけていった。これらの党派と新共同体の指導者達は、合併された2集落の双方に基盤を持ち、「騎士」と呼ばれる在地の小貴族達であった。拠点とした教会の領主支配の後退と、都市コムーネや領域君侯との複雑な関係および新たな小共同体の台頭を前に、基盤の再編による地域社会での指導性の保持を目指した在地小貴族層が、指導層として共同

体の行為能力を高めていったのであり、農村部における党派抗争とは、このような新たな広域秩序の単位となる地域社会を形成する運動の一環であることが述べられている。

こうした地域社会に基づく広域秩序と地域国家形成との関係を検討課題としたのが、第3章「14世ヴィスコンティ国家下ベルガモにおける代官と代官区」である。ここではヴィスコンティ国家の制度的新要素である代官と代官区が、ベルガモの在地社会との関連において考察される。代官という役職の定着を支えたのは、在地社会内部でゲルフィとギベッリーニの党派に結合して抗争を行いつつ、そこから生じる必要により代官職をも利用しようとする溪谷や農村の住民達であった。ヴィスコンティ権力の過渡期に作成された、溪谷部の諸条令集は、互いに異なった性格を持ち、代官の位置づけも地域によって異なっており、代官及び代官区が多様な在地の現実と、これに基づく必要性を反映していたことを示している。代官の在地での現実的な権力は弱体なものであり、それは地域住民の高い武力の利用可能性によって規定されていたが、そのような力と機会を住民に提供したのは、在地社会に浸透したゲルフィ・ギベッリーニの党派抗争と、それによる同盟関係であった。住民側は、代官の地位の弱さに基づいて、自らの権利を主張し、国家に対しては果たすべき義務の履行を求め、国家と地域の関係に保護と庇護の双務的性格を与えていった。さらに住民は、国家を自らの地域の紛争において正当化の根拠、又は紛争を有利に展開させるための回路として国家とその役人を利用していった。こうして国家と地域社会の間に密接な相互依存が形成されていったのである。

このような関係の担い手となる「ゲルフィ」と「ギベッリーニ」の在地的党派の実態が、第4章「14・15世紀ベルガモにおける在地的ゲルフィとギベッリーニ」では、ヴィスコンティ国家と在地社会の双方の平和政策及び平和維持機能との関連において検討されている。ベルガモ地方においては、「ゲルフィ」と「ギベッリーニ」は、ベルガモ市の農村支配領域内の、自立性の高い在地的小党派の緩やかな結合によって成立していた。この小党派間の結合は、生産・経済活動や軍事的同盟の網の目としての役割を果たしており、その間の紛争の展開においても、都市党派の影響からは自立した独自のメカニズムがはたらいっていた。ヴィスコンティ家の君主達は、都市の首領にそれぞれの党派を掌握させることによる平和政策を試みたが、在地的小党派の自立性は失われなかった。それ故実効力のある平和を求める動きが、党派を超える広範囲な地域住民の自発的な集会として現れることもあった。一方では党派がその内部での紛争解決にあたり、平和維持機能や仲裁の役割を高め、存在意義を強める一方で、地域の安全や平和への要求は、ときにはその党派の人的結合を相対化しつつ、領域内の地縁的結合の意義を高めていった。

そのような結合の基礎となる在地的人的結合の具体像を、第5章「中世後期の在地的党派と地域形成 —— 14・15世紀ベルガモ・アルメンノ及びイマーニャ溪谷における事例から ——」では、都市ベルガモの領域に属するアルメンノ及びイマーニャ溪谷の周辺において検討した。ここでは、一方ではベルガモ都市コムーネの領域編成や聖界所領の解体の影響を受け、分散してゆく地域が、他方では在地のギベッリーニの党派の人的結合によって結びつきを維持していた。そしてこのような党派の結合が、「ベルガモ織」と呼ばれる毛織物産業への投資と生産・流通などを通じて、地域の経済活動を支えていた。しかしこのことは一方では、安定的な経営を目指した地域的結合の重要性をも高め、こうした地域的結合は党派という人的結合の意義を相対的に低下させるものでもあった。

結論においては、各章の主要な論点が総括され、展望が付される。各章で明らかにされた地域と人間の集団の結合およびその再編のプロセスは、14世紀から15世紀においてはなお確定的な境界や制度を持つ完結的な地域と国家を実現するものではなかった。経済活動と平和のための地縁的結合に見られた地域的凝集性の高まりは、既存の党派の人的結合を完全に排除することではなく、地域の秩序はなおそれらに支えられていたのである。以上の総括からさらに、より安定的に編成された領域的枠組みへの志向と、それを超えて領域外へも開かれた、人的結合の重要性の存続という、北イタリア中世後期地域／領域国家に同時に内在する二つの傾向を指摘し、それらが互いを相対化し合い、また補強し合いながら、地域／領域国家の形成と展開を支える二重の糸として共存し続け、中世後期のインターローカルな地域秩序を支えていったという展望を示している。

論文審査の結果の要旨

中世の北中部イタリアは都市コムーネと呼ばれる、自治都市共和国の分立と競合により特徴づけられる。コンタードと称

する農村領域を持ち、中世後期にはシニョリーアや君主政の下で地域（領域）国家形成の中心となることにおいても、アルプス以北の都市とは異なる都市コムーネの歴史的な性格については、N・オットカールの古典的研究や1970年代のP・ジョーンズの研究が知られ、日本では同時期の清水廣一郎の本格的な実証研究の成果がある。しかし80年代以後のイタリア中世史研究では都市の文化史、社会史が主流となり、日本でも清水らが夙にその重要性を指摘した都市・農村関係の研究は殆ど顧みられなくなった。本論文はこのような日欧の研究状況を的確に把握したうえで、ヴィスコンティ家支配下のミラノとその領域を考察対象とし、国家（シニョリーア）と農村領域の相互関係に重点を置いて、13、14世紀における都市コムーネから地域国家への移行を連続的に捉えようとする。論者は長期に亘るミラノやベルガモなど、かつてのヴィスコンティ家のミラノ公領に属す地域の文書館調査により、国家の制度や統治にとどまらず、その下に置かれた地域社会と人間集団の自律性を、史料に密着した微視的観察により活写し、地域国家形成を社会史的過程として明らかにした。それにより、近年この分野をリードするG・キットリーニらの研究において、中心都市に対して農村領域の動向がなお過小評価されていることをも説得的に批判し、都市・農村関係の新たな認識に基づく地域国家形成を展望し得たことは、論者の功績である。

本論文の評価すべき特徴と個別的な成果を以下に挙げる。

第一に、国家的な政治秩序形成を法や制度、君主の統治活動からではなく、様々な地域レベルにおける紛争の解決、とりわけ仲裁と当事者間の合意・和解による平和維持の実践を中心に据えて考えようとする視点が、一貫していることである。この視点により、13世紀のロンバルディア（都市）同盟が、短期的な軍事同盟たるにとどまらず、都市間の紛争仲裁による広域的な秩序維持機能を担ったこと、またそうした機能は続く時代の君主の地域国家に継承されることが明らかにされた。

第二に、ミラノに従属する都市ベルガモと、その周辺渓谷地方の農村住民の生活と行動、それらの相互の交わりのミクロストリアを、ベルガモの未刊行史料の精査により描き出したことである。この考察により、個々の渓谷地方における親族集団の牧畜や毛織物生産などの経済活動と、土地所有、婚姻関係等による相互の結びつき、そして彼らと中心都市ベルガモの有力市民家系との関係をも詳細に再現し、そうした地域社会集団の自律性および、ベルガモ市当局やヴィスコンティの国家役人との間の緩やかな依存関係の動態を明らかにしたことは、成立期地域国家の研究に対する重要な貢献と評価してよい。

第三に、中世からルネサンス期のイタリア史を特徴づける「ゲルフィ」と「ギベッリーニ」の党派抗争を、政治的な分裂と混乱の要因とする通説に対して、新たな視点を示したことである。論者は、地域社会における党派関係が個々の集落や家族の土地所有や経済活動と密接に関わり、住民の生業と生活を保障していたことをふまえた上で、渓谷地方の局地的な小党派関係が都市ベルガモを中心とした広域的な党派に、さらには国家レベルの党派へと接合されたことが、人的レベルでの国家統合を促し、またそのような党派関係は、国家にとっても紛争のコントロールと秩序維持に利用しうるインフォーマルなシステムであったと見なす。しかし論者によれば、在地の党派は同時に、都市や中央の党派では統制しきれない自律性をも維持し、そうした広域的党派の限界から、ときには党派を超える地域独自の平和のための集会や合意形成が展開したという。党派結合において縦の従属関係が持つ意味は、本論文では十分に考慮されてはいない。しかし地方史料から、様々なレベルでの党派関係の実態と地域国家形成における機能およびその限界を明らかにしたうえで、人的・党派の関係と地域・領域的枠組みが、相互に規制し合い、また補強し合いながら地域国家の形成と展開を支えたことを、中世後期イタリアの政治的再編過程の特質として明らかにしたことは、本論文の最も重要な功績であろう。

本論文にはやや図式と論理が先行しているとの印象を与える箇所も散見するが、この点は現地の文書館調査を継続中の論者により、今後克服されていくものと期待される。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2008年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。